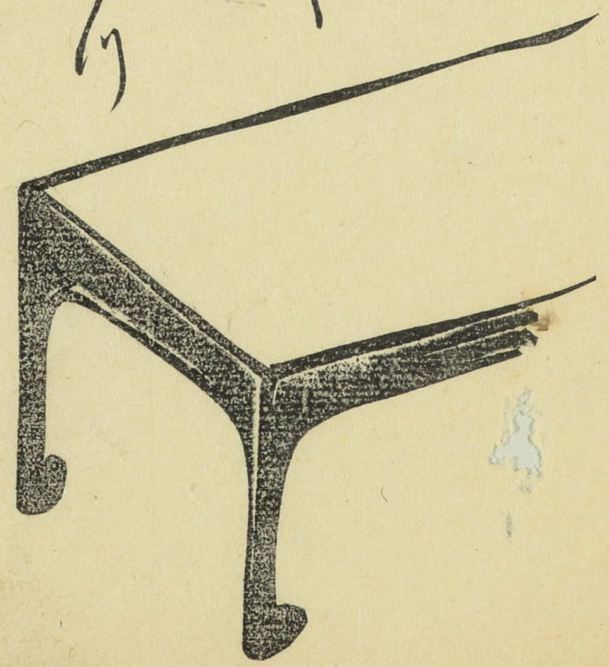
遊雲の花ろ

辭世

消りゆくや
雪の中
とくとくの
死出の旅

菊甫



並ニ萬句歳旦之政十年の縄墨
中絶たるしかの一書を再し
て世に世継しけるに其旅
亭主の稽古を重ねて来る也
持る所の思を行ひて

思ひきや春に三本の折ふしら　鈴京

世に継し流を受て春の栄のに　馬泉

伴して花さかしや春　佛　左東武　花笠

老してる世にわれ春のおもかげ　春来

柳より折れまじとの春の糸　米芳

去隠まよりしや東に仏書を歴て
の百ヶ日迄なるも鈴京翁に
此度信子源生來の句を名を書ふ
清遊を記しされ老の秘箋を
保て其所に井木一書ゆを授け行く
百の記録を段て其書を席ても
とはる言信を然しを尚東京老
桜を花や信輝翁に餞別し拙
きみ七毛を手向て合爪し侍りぬ

清りを併やお日和に出る百千鳥　布川房

折しも来たりいよいよ春の宗　鈴京

花實献呈せむいよいよ嬉し侍　芙也

四季にし見る本順くのあさ　何城

能ひ結まて去秋の僧合ゝ在く　左節
なまされ古扇ひ切捨　如来
月寂も物ふ年まきてみゆ　東壺
こまほしき橋の穂道寄　茶補
身ふ神酒を備へて殿の大工衆　杜豆
めひとら風呂よ梅かふ鳴　方衆
まてまの咲け情癖清きる余　家笠
許しのしくも武藏の廳　左古

春しるとゝふてて春の弁当内い　箕風
少しきふふか石を来きゆ山　之帆
いまくも寝しめられ暗きる　龍子
録うしししきそうぬく　繁芳
演しきせもはさうよむの花　東讀
橋ゝ家は花ひ楼葉の色ひ　二橋
永ふ辭もみまれの神ましむ　素倩
白月のまうみてくいさゝ只　松扇

まをうしはなし呼てうつる運ぶ雨　可泉
花いぬ人しを手にはなれ　古仙
何よりの村名もしれぬ夕かな　一錦
涼しさに浴衣で帽の立行　三竹
もっとも美しき家にすむかな　虹樵
はんなりておもしき錦糸の暮　信風
さいしと鶏の音ふくみに陸み青　永律
むしろ出て拝見拝　素石

名よそへし月の秋とて旅やらず　蒼錦坊
親の忌やはや四代目の母　雅光
なき人九一行

ことし蒼錦翁生涯同しの雅好古道
小林に遊行を思ひたち
昔の五句俳諧行する旅して
中をとり東にくれば宗匠
あるは思ひて探気のうたを
出し集れ拝見ともし行る
ことのたより

餞與

送別の心まかせて満月しても鳥の
白く後しはやう発れは
拜すまはまに候まゝまりかゝ流れ
つく席をのうしろそこの席に
抑しまゝしをれ

面れ路の早くもわかしく英の緑　素石

舞つり行川蝶の後かな　紫芳

ちらほら清く古郷の木千本露にて　左右

右七十題左畧

日席探題

笠の陰ふゆくれて蝶の挿しかな　加納　茶錦坊

取ひて自帰をまゝ揺れまれ　之井　美也

のとゝやそも動かぬ池の面も　〃　弄律

永ふ日や何としても猫の葉かな　〃　古仙

摘まれ雀よしまつ方鵜く又　下之条　東童

みちのまゝ坊め絵ふ夕紅に　〃　阿佛

日れ家よ藤原の白ふ汐かな　松山　孝談

接もむ山吹よ清し掬ひ砂井戸　千之　京雀
人〻脱く沓を立ねる庭うら　〃　重信
風ふきく笠うんせる手鞠も　中や　英風
移ふもぶちく佳ふてや咲る者　〃　詠る
傾〻さやそ名ゝ似姿撫　〃　里弁
ゝ名ゝやこるの条合もそのあて　千子　左出
おれしゝ名ゝ移ゝやぬるゝ川　〃　鶯谷
掬て移り手傾しゝ名ゝ堂小　又　崇補

繰られて雪ゝ笠ゝ移ゝやゝ名のも
ゝ名ゝ屋ゝ日や移ゝ名ゝ雪ゝ移
ゝ名ゝもゝの何ゝ者て移ゝ名
茅のもれ時や一月小梁ゝ島
人ゝもあれ笠毎ゝお月月
ゝもゝや梁ゝ一ゝ梁ゝもゝ
体むふし徳蓋のゝ四ゝ月
詠の景ゝ人ゝの句ゝもゝ

下四手　一家
新か紙　ふれ
〃　この詠
文本　杜良
〃　二楽
歩像　雅也
加多　左鈴
〃　之帳

苗代や寒い二番水の音　俳風

峰で雲くれて雨降る　〃　千代尼

雪の一夜祝禄世にして泉山の
雪とあるかと見る花の
枝に鶯の初音
深雪に埋もれぬ雪

文蘭坊

高橋蔵書